

風景って、風の景と書きますが、風がもたらすひとつの地球の表情というか、人間だけでなく地球もやっぱり息を吐いたり吸ったり、そういうリズムがあって、私自身そういう人間的なリズムと、どこかですごくつながっていて、そういうものを感じる時に、これが撮れたかなっていうフィルムが生まれるんじゃないかな、というふうに思います。

(秋岡美帆 『プレイバック・アーティスト・トーク』 東京国立近代美術館 2013年 p.9)

風をはらみ、さやぐ樹々。その足元に揺れる影と木洩れ日。森の中で交錯する光と闇——秋岡美帆(1952-2018)はカメラを用いて、自然界が見せるいくつもの表情をとらえてきました。そして、そのフィルムをNECO(New Enlarging Color Operation 拡大作画機)と呼ばれる機械により拡大プリントし、見る者を包み込むような大画面へと展開させた作品を発表してきました。本展は、近年新たに収蔵した作品を中心として、秋岡の作品世界の移りゆきをご紹介します。

1970年代よりカメラを用いた作品制作・発表を行ってきた秋岡は、1982年5月、大阪・池田市の工業技術試験所で一本の楠(くすのき)と出会います。明るい陽射しの中でダイナミックに揺れ動く楠の姿に感動し、すぐさまその場で長いロールフィルムを3本程撮影してしまっただけです。以降、12年間に渡り、この楠は彼女の重要な被写体となりました。

「さやぎ」、「そよぎ」、あるいは「風の色」、「時の色」と題された作品群は、すべてこの楠をモチーフとして撮影されたものです。明るい空を背景に、画面いっぱいに枝葉を伸ばした堂々たる姿や、風を受けてあたかも顔をほころぼせるように揺れ動く姿は、秋岡が「私の友達」と表現するように、どこか人間のような、非常に近い印象を与えます。それは、対象をそのままに写すのではなく、スローシャッター、アウトフォーカス、多重露光、流し撮りなど、あえて焦点をぼかすことにより、肉眼では見ることのできない世界を写し出していることに由来するのかもしれませんが。楠を撮影したシリーズの他にも、風に揺れる蕙の葉を撮影した作品や、作家自らがカメラを抱えて動きながらバラの花を撮影した作品も制作されました。

撮影したフィルムはNECOを用いて、拡大プリントします。NECOは、ポジフィルムを4色の電気信号に変換し、大型ドラムにセットした麻紙やキャンバスにエアスプレーガンで水性インクを吹き付けて着彩します。本来は屋外広告などの印刷物に用いる技法ですが、秋岡は1979年春からこの機械を用いて作品を制作してきました。NECOにより拡大プリントした後は、色鉛筆(主にダーマトグラフもしくはグリースペンシルと呼ばれるワックスが多く含まれている色鉛筆)を用いてアクセントをつけて完成させます。NECOによる色分解、エアブラシによる吹き付けは、作家およびオペレーターの手によりコントロールされる

ものの、機械の状態やその他の条件により、その仕上がりは都度異なるといいます。作品の中には同じポジフィルムを元にプリントされた作品が認められますが、色調や肌理に違いが表れています。

あたかも肖像写真を撮影するように楠を取り続けた秋岡ですが、ある夏の日、楠の足元に揺れる影の存在に気がつきます。そこから、「ゆれるかげ」のシリーズが誕生しました。風に揺らぐ樹々の影をとらえた一連の作品は、ときに水面に映る光のきらめきのような、全く異なる景色をも想起させます。ひとつの影を撮り続けながらも、自然界にあるさまざまな要素がたぐりよせられているかのようです。

1994年から1年間、秋岡は文化庁の在外研修員としてフランスとアメリカに滞在します。この間に秋岡は、自身にとって大切な3つのものを失ったといいます。最愛の父を亡くし、出生地である神戸は阪神・淡路大震災により甚大な被害を被り、そして10年以上撮り続けてきた楠も失われてしまいます。帰国後の亡失感の中で光明を求めた秋岡は、母親の住む三重県の青山町に移住し、森の中に入って作品を撮るようになります。そこで生まれたのが、「光の間（あらい）」と名付けられたシリーズです。青や黒などの落ち着いた背景色に突如として現れた光の姿や、闇の中に踊るひとすじの光が幾重にも振幅していくさまは、木立の間から立ち込める妖気のようなものすら感じさせます。最初は、樹々が風を受けて動くのをじっと待っていたのが、次第に大胆になり、風の誘いにまかせて秋岡自身も動きながら撮影するようになりました。その姿を想像すると、なにか人智を超えたものと交感しているようなさまが思い浮かんできます。光と闇、風の動き、空気、温度や湿度、香り、音など、自然界を構成するあらゆるものをフィルムに取り込んでいくようなイメージが沸き上がってくるのです。

楠の姿をとらえた初期の作品群は、作家が楠と正面から向き合う姿を想像させます。やがて、作家が向ける眼差しは足元へと移り、相手の顔を見なくてもその気配を感じ取るような姿勢へと変化します。そして、最終的には森の中に入り込み、自らも自然と一体となっていく喜びのようなものを感じさせる作品へと移り変わっていきました。私たちもまた、秋岡の作品と対峙するとき、同じような感覚を味わうのではないのでしょうか。秋岡美帆という一人の作家が表現して見せてくれた、自然と人間との間の響き合いを、この展示を通して感じただけであれば幸いです。

(三重県立美術館学芸員 原 舞子)

--

略歴

- 1952 兵庫県神戸市に生まれる
- 1979 大阪教育大学大学院教育学研究科美術教育専攻修了
- 1994 平成5年度文化庁1年派遣芸術家在外研修員（フランス、アメリカ）

1997-2018 大阪教育大学にて助教授(1997-2007)／准教授(2007-2008)／教授(2008-2018)を務める。3月29日、死去。

主要参考文献

永原ゆり・小本章『光の版画』 1988年 美術出版社

梅津元「光の化石」／秋岡美帆「『ゆれるかげ』をめぐる」『秋岡美帆展 ゆれるかげ』図録
TEMPORARY SPACE #021 1992年

松浦寿夫「あるかなきかの震えのなかで」『秋岡美帆展』図録 SEIBU 神戸 1993年

本江邦夫「流出について」『MIHO AKIOKA 光の間』図録 BASE GALLERY 1998年

光田由里「秋岡美帆 光の間 (あはひ)」『MIHO AKIOKA Inter Lucem』ギャラリー
H.O.T 2001年

石崎勝基「あわいよりあわあわと泡がたち」『秋岡美帆展』図録 三重県立美術館 2002年
『プレイバック・アーティスト・トーク』図録 東京国立近代美術館 2013年

--

特集展示 秋岡美帆——風の景——

2020年4月1日(水) — 8月30日(日)

三重県立美術館 柳原義達記念館 A室

デザイン 谷澤陽佑